全日本クラシックカメラクラブ

2012年3月の研究会報告

「カメラと写真と日本近世史」

会員番号0954　小松輝之

今日は少し毛色の変わった話をしてみたい、題して「カメラと写真と日本近世史」。

日本という国に初めてカメラがお目見えしたのは、1848年（嘉永元年）のことで、徳川12代将軍家慶の時代である。長崎の上野俊之丞がダゲレオタイプの写真機（写真1）を輸入したのだ。俊之丞のメモ（書留）には、「ダゲリヨティープ（写真2）」と記されている。そのカメラは薩摩藩の島津斉彬の手に渡った。彼は大変興味を持ち、自分でも研究したが、優秀な部下に命じてなんとか写真を撮れるように研究させた。10年後、1857年（安政4年）9月17日に、ようやく斉彬の肖像写真（写真3）が撮れた。これが現代に残る日本最古の写真である。その後、島津藩では写真の研究が進み、ガラス湿板による写真も撮影された。

写真4は斉彬の娘達、あの篤姫の義妹たちの写真である。この写真は卵の白身を接着剤にして、感光剤を塗布した鶏卵紙と呼ばれる印画紙に焼いたもので、これにより複数枚の写真が複製出来るようになった。

写真5のカメラは堆錦カメラと呼ばれるカメラで、最古の国産カメラである。現在3台が現存している。作ったのは名古屋の指物師味田

写真1　ダゲレオタイプのカメラ

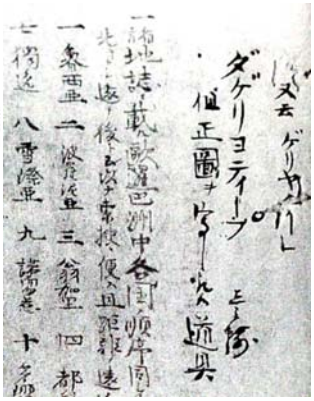

写真2　上野俊之丞のメモ

写真3 島津斉彬の銀板写真

写真4　篤姫の妹たち

写真5 国産最古のカメラ 堆錦カメラ

写真6 パリ万博に臨む徳川昭武

写真7 六代目杉浦六右衛門

写真8 フランス軍の制服を着た徳川慶喜

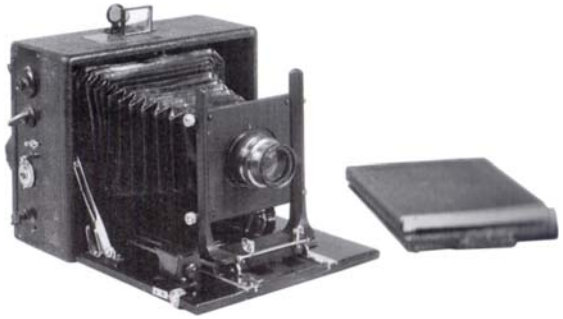

写真9 慶喜愛用のポニープレモ

写真10 慶喜が撮った写真

写真11 写真現像の風景

孫兵衛だといわれている。1台は信州の佐久間象山にわたり、さらに巡り巡って石黒敬七氏にわたり、現在では新潟県の柏崎市にあるという。佐久間象山は幕末の開明派学者で、弟子に吉田松陰、勝海舟、坂本龍馬などがいる。大砲の製造や電信、ガラスなどを紹介したことで知られる。彼のすごいところは知識だけでなく、実際に作ったり実験してみたりしたことである。このカメラの製造も、もしかすると象山がかかわっていたかもしれない。

1862年、上野彦馬が長崎に、下岡蓮杖が横浜に写真館を開く。日本最初のプロの写真師である。

1865年(慶応元年)、パリで万国博覧会が開かれる。フランス皇帝ナポレオン3世から招待を受けた幕府は、将軍慶喜の弟の徳川昭武(写真6)を派遣する。随員として渋沢栄一等が同行する。渋沢の日記によると、一行はパリまでの旅のために、行李一杯のわらじを持参したという。

明治に入ると、写真産業が萌芽期を迎える。明治4年には浅沼商店が、続いて小西六が写真材料の販売を始める。

写真7は、織田織之助信貞という写真師が撮った、小西六の主人六代目杉浦六右衛門である。織田織之助は織田信長の血を引く旗本で、禄高2千石の立派な武士であったが、幕府崩壊と共に職を失い、写真師として身を立てた。このように旧幕臣がそれまでの蘭学の知識を生かして、写真師で生計を立てたケースがかなりあったようである。

感光剤が銀板から湿板へと進化し、さらに乾板がイギリスで工業化され、翌1881年(明治14年)には、早くも日本に輸入される。乾板が輸入されると、それまでプロでなくては難しかった写真撮影が、アマチュアでも可能になって、日本人の写真好きに火がついた。もちろんカメラも乾板も高価だったから、一部の大金持ちから写真熱は始まった。その代表が

写真12 亀井茲明(これあき)

←写真13
亀井茲明が持参した
従軍暗箱

↙写真14(下左)
射殺された敵の間諜

↓写真15(下右)
逃げ惑う婦女子

最後の将軍、徳川慶喜である(写真8)。

写真9は慶喜の愛用したカメラで、アメリカのロチェスター社製のポニープレモだったという。慶喜が撮った写真が残っている。写真10は近所の子供だろうか。征夷大将軍に撮ってもらっているという緊張感は全然無い。時代が変わったことを感じさせる写真だ。

弟の徳川昭武の別邸が松戸市にある。兄弟は仲が良かったので、たびたび昭武邸で写真を楽しんでいたらしい。写真11は昭武邸で、写真を現像しているところだろうか。珍しい写真である。

1894年(明治27年)日清戦争が始まる。日本軍は写真斑を編成して、小西六に四つ切りの携帯用暗箱を発注する。日本最初のカメラメーカー小西六の誕生である。この戦争には、最初の民間従軍カメラマンも同行した。津和野の殿様亀井茲明(写真12)である。国

写真16 チェリー手提げ暗箱

民新党の亀井久興氏の曾祖父にあたる。

写真13は彼が持って行った暗箱である。これも小西六製だ。彼はこの他に5台、総重量1トンの器材を従者に運ばせた。彼が撮った日清戦争の記録である(写真14)(写真15)。

1903年(明治36年)、小西六は子会社の六

写真17　ツァイスの双眼鏡

写真18　水師営の会見

写真19　本所被服廠跡

写真20　鎌倉鶴岡八幡宮

写真21　津波に襲われた伊豆伊東

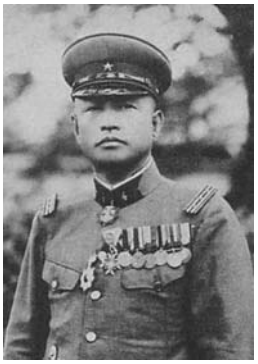

写真22 石原　莞爾

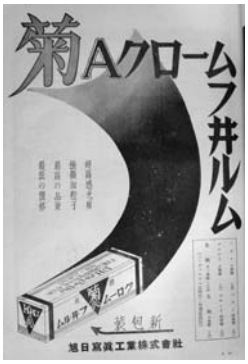

写真23 菊フヰルムの広告

櫻社に、名刺判の小型カメラを作らせ、チェリー手提げ暗箱と名付けて売り出した。我が国最初の量産型カメラである(写真16)。

1904年(明治37年)、日露戦争が起こる。写真17は「敵艦見ゆ」との知らせを三笠艦上で受けた時、東郷司令長官が手にしたツァイス・イコンの双眼鏡である。写真18は旅順開城の水師営会見での乃木将軍と、敵将ステッセルだ。乃木将軍は敗残の将をいたわって、写真はこの一枚だけしか許さなかったという。

さて時代は大正に入って、1923年(大正12年)、関東大震災が起こる。首都を襲った未曾有の大震災の記録を、東京帝国大学地震学教室が乾板写真に残し、それが上野の科学博物館に現存している。その内の数枚を紹介する。写真19は両国の被服廠跡。広場になっていたので火に追われた人たちが逃げてきて、そこへ猛火が襲い3万人以上の人が、ここで命を落とした。被害は東京だけではなく、鎌倉の鶴岡八幡宮も倒壊(写真20)、伊豆の伊東には津波が押し寄せた(写真21)。

1925年、大正最後の年に、ドイツでライカが発表される。いち早くそのライカを買って、日本に持ち帰ったドイツ駐在武官が居た。石原莞爾(写真22)である。彼は日本で最初のライカユーザーとして名を残したが、満州事変の首謀者としても名高い。1931年(昭和6年)9月18日は日本では満州事変というが、中国では中日14年戦争のはじまりとして重要な記念日になっている。

昭和初期は日本の写真産業の創世期でもある。昭和3年に国産初のロールフィルムである菊フイルム(写真23)が発売される。1年後にはさくらフイルムが続く。カメラの最初の量産機は、前述のチェリー暗箱まで遡るが、昭和に入ると、カメラは一気に大衆化する。

東郷カメラ(写真24)は盛り場の露天商が、実演付で売っていた。ドイツカメラの輸入も多くなり、国産カメラ産業も次々と産声を上げた。写真25はキヤノンの最初の広告である。潜水艦はイ号、飛行機は九二式、カメラはKWANON、みんな世界一とある。1934年(昭和9年)の広告だが、このカメラを作ったキヤノン創業の人である吉田五郎氏は、キヤノン発売前に会社を追われ、戦後は秋葉原デパートの外商で、売掛金の計算をしていたと聞いたことがあるが、本当だろうか。

戦争は国産光学工業の礎を作った。東京光学や日本光学工業は陸軍や海軍に納める光学機器が主体業務であった。戦艦大和や武蔵に積まれた基線長15mもの巨大測距儀は日本光学製だった。

そして敗戦。廃墟の中から立ち上がった日本は、いち早くカメラを生産する。敗戦の年の年末には、もうキヤノンが戦後第1号機を3台作った。戦前、普及型と呼ばれたキヤノンである(写真26)。ニコンは、軍需会社であった日本光学の最初の民需製品として、昭和23年に発売された(写真27)。上得意だったキヤノンに遠慮して、外観をライカ風ではなく、コンタックス風にしたという話が伝わっている。

さて、ニコンが出てきたところで、日本カメラ産業の恩人とも言えるDavid D Duncanが、ライカにニッコールを付けて撮った朝鮮戦線の写真28を紹介して、私のつたないスピーチを終えようと思う。

写真28　D. D. ダンカンの朝鮮戦争

写真24 東郷カメラ(1930年)

写真25 KWANONの広告

写真26　キヤノン普及型

写真27　ニコン　Ⅰ型